

(様式1)

令和6年度 学校評価結果報告書(特別支援学校用)

		学校整理番号		特11		
		学 校 名		青森県立弘前第一養護学校		
		対象障害種別		視覚・聴覚・知的・肢体・病弱		
(1) 学校教育目標		こどもたちの発達に応じた知識・技能及び社会参加できる力を培い、可能な限り自立した生活ができ、生きることの喜びを見出せる人間に育てる。				
(2) 現状と課題		本校は知的障害を対象とする特別支援学校であり、小・中・高等部を合わせ205名の児童生徒が在籍している。小・中・高等部の一貫性・系統性のある教育課程の編成や指導内容の精選を進め、「自立と社会参加を目指し、地域とともに、一人一人の幸せ(ウェルビーイング)を育む学校づくり」を学校経営のスローガンに掲げて教育活動に取り組んでいる。また、りんごと岩木山」をテーマとした特色ある教育活動を推進するとともに、「地域とつながろう弘一養SDGsプロジェクト」に取り組んでいる。				
(3) 重点目標		1 教育的ニーズに応じた指導・支援の充実と主体的学習活動の推進				
		2 教育的ニーズに応じたキャリア教育の充実				
		3 保護者・地域関係機関等との協働による開かれた学校づくりの推進				
		4 安全で安心な学校づくり				
(4) 結果の公表		本校の保護者には3月に資料を配付して、主に今後の課題や改善策について公表する。また、地域住民等に対しては、本校のホームページに掲載し公表する。				
(9) -イ 学校関係者評価委員会の構成						
◎学校運営協議会委員(12名) ・弘前学院大学社会福祉学部講師 ・弘前市弥生学園園長 ・弘前地区手をつなぐ育成会会長 ・弘前市連合婦人会副会長 ・本校PTA会長 ・株式会社タカシン製造2部副部長 ・Farmなる実 ・駒越町会長 ・船沢小学校校長 ・船沢中学校校長 ・社会福祉法人伸康会理事長 ・津軽障害者就業・生活支援センター所長						
自 己 評 価					学校関係者評価	
番号	(5) 評価項目	(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達成度	(9) -ア 学校関係者からの意見・要望・評価等	(10) 次年度への課題と改善策
1	教育的ニーズに応じた指導・支援の充実と主体的学習活動の推進	(1)それぞれの実態に応じた個別の指導計画作成とそれを活用した授業の充実	①児童生徒一人一人の実態を的確に把握して個別の指導計画を作成し、重点課題を中心に発達段階にそった指導に努めた。 ②効果的な指導を展開するため、児童生徒の興味・関心を考慮した教材の研究や障害特性に応じた支援ツールの開発に取り組んだ。	A	○学校に対する評価が高いと感じた。学校に対する期待の高さの表れであるとともに、求める理想の高さにもつながってくると思われる。現場の意見からも、学校をよくしていこうという気持ちが伝わってきた。○VRは新しい取組で、とても印象に残った。コントローラーでの操作、水耕栽培でのデータ分析は将来の仕事につながると感じた。 ○ICTの活用で便利になりすぎ、弊害も出てくるため留意していきたい。 ○プロジェクトVRは、コントローラーでの操作など、なかなか経験できないことなので、ぜひ生徒にたくさん経験させてほしい。また、360度カメラの撮影は、カメラをつけたヘルメットを生徒にかぶってもらい、撮影するという方法もあるのではないかと。	○一人一人の知的及び身体的発達段階に応じた学習内容の設定と障害特性に応じた必要な支援の提供 ○個別の指導計画を活用した授業の充実と授業研究を通じた授業改善 ○教員の専門性の向上
		(2)小学部・中学部・高等部の12年間における一貫した系統性のある教育課程の編成と指導内容の精選	①児童生徒の将来の自立を念頭に発達段階を考慮し、一貫性、系統性のある教育課程の編成に取り組んだ。 ②学習指導要領に対応した教育課程になるよう各学部、全校で見直しを図り、つながりや発展性等について検討した。	A		○12年間の一貫した系統性のある指導内容、指導方法、指導時数等、教育課程の編成
		(3)主体的・対話的で深い学びの視点からの学習に対する研究の推進とICTを活用した指導実践の蓄積	①一人一台端末が整備され、ICT機器を活用した授業実践に取り組んだ。 ②ICTを活用した指導について、外部講師を招いての教員研修に取り組んだ。 ③今年度から、校内研究で「学びをつなげ、深め、生かす児童生徒の育成」のテーマを設定し、学びを実生活につなげることを意識した取組について研究に取り組んだ。	A		○授業研究の推進 ○ICTの積極的な学習活動への活用(DX加速化推進事業含む) ○教員の研修機会の充実

2	地域に根ざした特色ある教育活動の充実	(1) 交流及び共同学習の更なる推進	①学校間交流は、小学部は船沢小学校と、中学部は船沢中学校と、それぞれ2回、高等部は弘前実業高等学校と実施した。 ②中学部の授業において、作業学習（畑・木工班）で弘前工業高等学校建築科の生徒を講師に招いたり、総合的な学習に時間の授業で柏木農業高等学校の生徒から花の植え方を習ったりして交流した。 ③高等部では、一部の生徒が柏木農業高等学校に出かけ、農業実習を行った。 ④居住地校交流は、小学部35名、中学部5名が、それぞれ1～3回実施した。	A	○居住地校交流の実施件数は年々増加傾向にある。課題もあるが、工夫して取り組み、充実を図ってほしい。 ○地域に根差した教育活動を進めるためには、地域に学校の取組や児童生徒の様子を知ってもらうことが大切である。今後も、同世代の児童生徒との交流や地域に出での学習活動を含め、様々な方法での情報発信に努めてほしい。	○学校間交流、居住地校交流の工夫とさらなる推進 ○地域の教育委員会や小中学校、高校との連携強化
		(2) 「りんごと岩木山」をテーマとした教育活動の充実と発展	①「りんごと岩木山」をテーマとした教育活動では、作品を校内に掲示した。 ②小・中学部では、りんごの栽培（摘果、葉取り、収穫）、加工（ジュース、スイーツ作り等）を実施した。栽培では、りんご栽培を手掛けている保護者に協力してもらい、作業することができた。	A		○「りんごと岩木山」をテーマとした諸活動の充実
		(3) 本校の教育活動を地域へ発信するための活動の工夫と地域における特別支援教育のセンタ－的機能の充実	①福祉作品展、カルチャロード等、地域のイベントに参加した。カルチャロードでは、生徒がボランティア活動に参加した。また、毎年実施しているイオンタウン弘前樋の口での作品展を「合同作品展」と名称変更して弘前第二養護学校と合同で開催し、中学部と高等部は作業製品の販売学習も行った。ホームページやチラシの他、地元のラジオ局や新聞社の協力を得て宣伝活動を行うことで、多数の方に来場いただき、本校の教育活動に対する理解・啓発を図るよい機会となった。 ②高等部の作業体験学習では、弘前市役所等での販売学習を行った。作業製品の販売や作業内容の紹介により、地域の方々に広く情報発信した。 ③小中学校舎、高等部校舎の両方で教育相談を受ける体制をとっている。	A		○地域の人材をはじめとする地域資源の積極的な活用 ○地域の関係機関との連携・協力による積極的な情報発信 ○地域における特別支援教育のセンタ－的機能の充実

3	教育的ニーズに応じたキャリア教育の充実	(1) キャリア教育の概念に基づく小中高一貫した指導の推進と就労に向けた学習内容の体系化	① キャリア教育の視点を生かした小学部からの一貫性・系統性のある指導の一環として、小学部におけるリサイクル活動や、中学部における「働く週間」等の取組を行った。高等部では、作業学習や職業の授業改善、実習の充実に積極的に取り組んだ。 ② 全学部・学年で「キャリア・パスポート」を作成し活用した。	A	○ 水耕栽培は、新しい視点からの農業への取組でよい。トライ＆エラーで良い経験ができると思われる。 ○ 進路に関する情報が多く、こどもにマッチングした進路となっていて、大変よい。 ○ 農福連携について、保護者から「見えてきている」という意見があった。始まったばかりで、いろいろと弊害もあると思うが、ぜひ進めていってほしい。 ○ 地域とつながった活動を大事にしている。この協議会も、地域の代表として、学校とどうつながっていくかを検討し、連携を強めながら進めていきたい。 ○ 地域の人材を活用した教育活動は、とても意義のあるものである。これからも積極的に進めてほしい。 ○ SDGsの取組に関しては、年齢や学年に応じた活動でよいと思った。また、自分で作ったものや活動したことが、どのような役に立っているのか、どういうことに繋がっているのかを理解できているところがすばらしい。課題としては、学んだことを卒後に家庭や地域社会でどのように実践できるかだと思う。	○ 小学部リサイクル活動の発展 ○ 「キャリア・パスポート」の活用等を通した12年間の一貫した系統性のあるキャリア教育の推進
		(2) 地域の人材や資源を活用した授業の推進と卒業後の就労・生活支援を見据えた職業教育の充実	① 弘前職業安定所や津軽障害者就業・生活支援センター、青森障害者職業センター、さくらジョブネット等、関係機関との連携強化に努めた。 ② 公共施設（市役所庁舎、市民会館）の清掃体験を実施するなど、地域の施設・人材等、社会資源の積極的活用を図った。また実習先や進路先の開拓・確保に努めるなど児童生徒一人一人の進路選択や進路実現に取り組んだ。 ③ 「ドリカム人づくり推進事業」を活用し各学部において児童生徒の発達段階や課題に応じた体験的な学習活動を設定し、外部講師として地域の人材を積極的に活用した授業に取り組んだ。	A		○ 地域人材や地域資源の積極的な活用による授業の充実 ○ 関係機関との連携強化 ○ 実習先や進路先開拓の推進 ○ 高等部職業教育の充実
4	保護者・地域関係機関との協働による開かれた学校作りの推進	(1) 個別の教育支援計画の作成と活用並びに評価を通じた保護者や地域、関係諸機関等との積極的な情報交換及び情報共有	① 個別の教育支援計画や指導計画を作成し、年2回、保護者との個別面談で、目標や到達度について保護者との情報共有を図った。 ② 児童生徒の学校・家庭での生活等について、連絡帳で情報共有した。また、定期的に学級通信を発行し、学級の教育活動を伝えるなど相互理解に努めた。 ③ ケース会議、通院帯同等を適宜実施し、地域の福祉・医療・労働等の関係機関との情報共有を図った。	A	○ 船沢小学校と船沢中学校合同で避難訓練を実施しているが、令和7年度はこども園も一緒に実施する予定である。避難訓練を地域ぐるみで取り組んでいくことが大事である。 ○ 駒越町会にある7つある花壇の整備を、弘一養の生徒と町会の人と一緒に世話できるとよいと思った。 ○ 町内の人たちの認識が低いように感じる。生徒の活動が見えるように、もっとアピールしてはどうか。 マスコミに取り上げられているツデーマーチやアップルマラソン前のゴミ拾い等に参加するという方法もある。知名度が上がるような取組をし、社会との交流があると、生徒の自信にもつながると思う。 ○ さまざまな取組をどんどん発信して広めていってほしい。	○ 個別の教育支援計画の作成を通した保護者との一層の情報共有 ○ 学級通信や連絡帳等を通した日々の相互理解の促進 ○ 地域の福祉・医療・労働等の関係機関との連携推進
		(2) 学校ホームページや学校だより、PTA通信等による教育活動の積極的な情報提供	① 多くの人に本校の教育活動を知ってもらうため、学校ホームページで学校・学部行事や特色ある教育活動を中心に紹介した。 ② 学校だよりやPTA通信を定期的に発行し、保護者や関係機関、地域に対して情報発信した。	A		① 学校ホームページ、学校だより、PTA通信、SDGs通信等を活用した教育活動の積極的発信
		(3) 外部関係者からの意見を参考にした教育活動の計画・実施	① 学校運営協議会を3回開催し、地域と連携した教育活動や農福連携に向けた取組等について委員からたくさんの助言をいただいた。	A		○ 学校運営協議会をより効果的に活用するための取組
(11) 総括	今年度も、基本的な感染予防対策を講じながら、通常どおり教育活動を計画・実施することができた。教職員による自校評価は、どの項目もすべてA評価となり、全般的に高い評価であった。また、保護者アンケート及び学校関係者アンケートにおいても、全ての項目がA評価となり、高評価であった。 今後も、学校教育目標の実現に向け、DX加速化推進事業及びICT機器等の活用を含む教師の授業力向上のための研修機会の確保や、就農を含めた実習先及び進路先の開拓、家庭や地域との連携強化のための取組等について、学校運営協議会等を有効に活用しながら、取組を進めていきたい。					